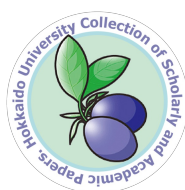




Title	『列強少年の社会教育』（1923）にみるスカウト・ゲーム及び「遊技」に関する研究
Author(s)	石立, 克己
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 144, 31-48
Issue Date	2024-06-28
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.144.31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92700
Type	departmental bulletin paper
File Information	04-1882-1669-144.pdf



『列強少年の社会教育』（1923）にみる スカウト・ゲーム及び「遊技」に関する研究

石 立 克 己*

【要旨】 本稿は奥寺龍溪著『列強少年の社会教育』（1923）にみるスカウト・ゲーム、「遊技」（奥寺は「遊戯」ではなく「遊技」の語を用いる）について明らかにすることを目的とする。1922年に設立した少年団日本連盟を通じた社会教育運動が日本に定着した経緯については数多論じられる中、スカウト運動が日本で普及し始めた当初に「遊技」がどのように運動の中に位置づけられたのかについては明らかにされてきていない。そこで、スカウト教育理論の形成に役割を果たした『列強少年の社会教育』をもとに、1920年代の少年団日本連盟においてゲームや遊びがどのように理論化され、連盟の活動に位置づけられたのかについて検討した。結果、『列強少年の社会教育』は遊戯と競技の中間にあった「遊技」を少年団の教育として重視し、英国のスカウトに忠実でありながらも、戦前の初等教育段階の子どもの発達段階に応じたスカウト・ゲームを「遊技」概念を通じて、普及させるものであったことが明らかになった。

【キーワード】 スカウティング、少年団、「遊技」、ゲーム

はじめに

「スカウティングは主知主義に基づくのではなく、ゲームを通してその精神を普及することにあるScouting is not a Science, it's a Game」。この一文はバーデン・パウエル（1857-1941年）によって創始されたスカウト運動の基本方針を示し、もともと“Scouting is not an abstruse or difficult science: rather it is a jolly game”（Robert Baden-Powell, *Aids to scoutmastership: a handbook for scoutmasters on the theory of scout training*, 1919）と記載されていたものが、普遍化過程で簡約化されたものである¹。単なる知識や技術の伝授よりも、ゲームや遊びを通してスカウト運動の精神を普及することは運動が始まって以来の伝統であり、上記のスローガンは今日においても主唱されている²。なお、現在の公益財団法人ボーイスカウト日本連盟の前身となった少年団日本連盟は1922年に設立された。したがって、今日、日本における社会教育運動としてのスカウト運動の歴史は100年を超える。それゆえ、これまで日本における少年団、スカウト運動の歴史について、その成立過程や、個々の少年団の活動内容を語る論文は多数存在する。

たとえば、上平泰博、田中治彦、中島純による『少年団の歴史』³や田中治彦による『少年団運動の成立と展開』⁴は英国にて発足したスカウト運動が日本に伝播し、少年団日本連盟の成立に至るまでの経緯、1945年の少年団日本連盟の解散、戦後のスカウト運動の復興までの通史を描いた。そして、矢口徹也による『女子補導団』⁵や圓入智仁による『海洋少年団の組織と活

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程 身体教育論講座（身体文化論）

動』⁶はガールスカウト、シースカウトの影響を受けて日本で発足したスカウト系3団体の全体象や個々の団員の活動内容を明らかにした。また近年、圓入⁷、昆野伸幸⁸は、初代総長であった後藤新平（1857-1929年）や初代理事長であった二荒芳徳（1886-1967年）らの思想と少年団について論じ、松岡悠和は金光教、浄土真宗本願寺派、同大谷派と少年団日本連盟の関係に注目した⁹。しかし、少年団日本連盟の黎明期にスカウトのゲームや遊びの概念が日本でどのように翻訳され、運動の中に位置づけられたのかという点から分析した研究は多くなされているわけではない¹⁰。

少年団史研究においてこれまでゲームや遊びが注目されてこなかった理由として、少年団における教育方法を検討する際に、英国由来のパトロールシステム¹¹やバッジシステム¹²といったスカウト運動に特徴的な教育方法の採用の有無が問われてきたためであったと考えられる。例えば、中島は『少年団の歴史』にて、少年団の訓練法は「イギリスのスカウティング理論に、日本固有の精神的伝統とみなされた皇国思想や武士道精神を理念として結合させたものである」¹³とし、健児教育（ここでは少年団における教育を指す）の方法と技術はイギリスのものと比べてそれほど差異がなく、健児教育の要諦として「班制教育」（パトロールシステム）、「進級制度」、「技能章制度」（バッジシステム）の三つをあげている。同様に、圓入も海洋少年団の方法論を検討する際に、「班」制度、「進級章」が授与されて「進級」する制度、「技能章」を与える制度の3点に着目した分析を行った。パトロールシステム、バッジシステムに着目した少年団の教育方法に関する以上のような分析はスカウト式の教育法を採用した少年団とそれ以外とを区分する際の指標となった。しかし、少年団の教育方法の分析において上記を重視した結果、スカウト運動の基本方針であるゲームや遊びを通した教育を少年団の指導者がどのように理解したのかは十分に検討されてこなかったといえる。そこで、本研究では、ゲームや遊戯に着目することで、冒頭で示したスカウティングの基本原則、「主知主義に基づくのではなく、ゲームを通してスカウト運動の精神を普及することにある」の意味を明らかにすることができると考えた。

特に、本研究では初期スカウト運動の牽引者の一人であり、指導者育成と国際協力に尽力し、少年団日本連盟の主事であった奥寺龍溪（1877-1936年）¹⁴に注目する。奥寺は英国のスカウト運動の動向に精通し、少年団日本連盟理事長であった二荒芳徳から「同兄は一身を捧げてボーイスカウトの文献の翻訳に力を傾倒され…中略…少年健児教範、青年健児教範、幼年健児教範を始めその他多くの連盟出版物は同兄の努力にその大部分を負うものである」¹⁵と評され、実践用語と自国語の間隙を埋める翻訳語の解釈に苦心した人物であった。しかも、奥寺著『列強少年の社会教育』（1923年）は小学生徒を対象として指導する際の「遊技編」として編まれたものであり、遊戯、ゲームに関する理論が含まれている。よって、本稿は『列強少年の社会教育』にみる奥寺龍溪のスカウト論』を分析することで、日本におけるスカウト運動にみられたスカウト・ゲーム、「遊技」（奥寺は「遊戯」ではなく「遊技」の語を用いる）を明らかにすることを目的とする。

研究方法

上述の目的を達成する上で、以下の方法論が有効であると考えた。まず、奥寺による『列強少年の社会教育』について論じる前に、設立当初の少年団日本連盟が紹介した遊戯とはどのようなものであったのかについて触れる。少年団日本連盟設立当初の1920年代には二つのスカウ

ト教範が刊行されていた。

そもそも、1920年代は日本におけるスカウト運動の全国組織少年団日本連盟がその運動方針を巡って議論した時期にあたる。中島によると、この時期の連盟はスカウト式の教育法だけに基づかなかった各地方加盟団体の連絡、互助目的での連合組織の側面と、国際的なボーイスカウト運動を各少年団に啓蒙しようとする側面があったという¹⁶。こうした傾向を中島は連盟における地方主義と国際主義と呼んだ。但し、連盟の中央はスカウト運動を啓蒙しようとする国際主義の立場にあったという¹⁷。こうした時期にバーデン・パウエル著、少年団日本連盟訳『少年団教範（スカウティング フォア ボイズ）』（1925年）が翻訳され、深尾韶著『スカウト読本』（1925年）も刊行された。それゆえ、奥寺著『列強少年の社会教育』について論じる前に、スカウト運動の在り方を分析する際にこれらの書に注目し、そこに見られた遊戯の内容について概観しておきたい（1.「少年団日本連盟における遊戯について」）。

『少年団教範』は英国ボーイスカウト運動の教範書であり、英国の*Scouting for Boys*を訳出したものであった。同書には、当時の活動プログラムや遊戯、ゲームに関する詳細な記述がみられる。それゆえ、『少年団教範』をもとに、少年団日本連盟が模範とした遊戯の実践について論じる（1-1「『少年団教範』におけるスカウト・ゲームと少年団日本連盟」）。上記の『少年団教範』が英国の書物を訳したものであったのに対し、深尾の著作『スカウト読本』は翻訳書ではなかった。深尾は『少年団教範』よりも先に出された*Scouting for Boys*の翻訳、『少年軍団教範』（1915年）¹⁸の訳者でもあり、少年団日本連盟の設立にも携わっていた。深尾は上記の『少年軍団教範』に基づいて、『スカウト読本』を刊行し、当時の教育プログラムの中で遊戯、ゲームの具体例を示している。よって、次に、深尾による『スカウト読本』の中に示されていた当時の遊戯がどのように用いられていたのかについて論じる（1-2「深尾韶のスカウト教育論と遊戯」）。両書を通じて、1920年代の少年団日本連盟がどのような遊戯の実践を求め、スカウト教育の実践の中で、遊戯をどのように位置づけていたのか概観できる。

しかしながら、どのような自国語を用いて翻訳されたのかは示されていないが、英国由来の「スカウト・ゲーム」や遊戯の概念を当時の少年団関係者が如何に捉えていたのかを理解する上で上記の2書には限界がある。なぜなら、冒頭で述べた通り、スカウティングのスローガンは具体的な実践を通して理解されるものであったため、個々のゲームを翻訳する際にあてられた自国語との間には距離が生じ、翻訳語のみでは理念と実践の関係がわかりづらいからである。

これに対し、奥寺の『列強少年の社会教育』は実践用語と自国語の間隙を埋める翻訳語の解釈に苦心されていると、二荒が評していたことは先に述べた。よって、次に「『列強少年の社会教育』にみる奥寺龍溪のスカウト論」について論じる（2.「『列強少年の社会教育』にみる奥寺龍溪のスカウト論」）。

なお、『列強少年の社会教育』は1923年に尚文堂より出版された。同書は『ボーイスカウトの精神』（中央報徳会、1922年）、『少年団訓練法要義』（教育研究会、1924年）と三部作をなす奥寺の著作のひとつであり、各種教範の翻訳が追いついていなかった時代に、少年団日本連盟から少年団指導者検定の参考書として指定されるなど、指導者に向けに書かれ、活用されていた教本にあたる¹⁹。

また、『列強少年の社会教育』には「ウルフ・カップ²⁰の八歳から、十一、二歳までの小学生徒を対象として、遊技編を編んだものである」と述べられており、小学校年代の子どもたちへの指導書に相当していた。奥寺は同書の中でスカウト教育の目的を「実践実行による人格の

陶冶」であるとし、その教育手段として「遊技」を重視し、「遊技」の語を用いて、スカウトにおける遊び、ゲームについて論じている。そこで、奥寺が用いた「遊技」概念に着目し、スカウト・ゲームに関する叙述を分析した（2-1『『遊技』によるスカウト教育』）。しかも彼は『列強少年の社会教育』の中で、「遊技」の教育的価値を説明する際に、スポーツ、学校教育に言及している。

以上をもとに、『列強少年の社会教育』の中で展開された「スカウト論」にみられる「遊技」についてまとめ、遊技を主体とした教育をどのように実施することを理想としていたのかについて小括する（2-2『『遊技』、スポーツ、スカウト・ゲーム』）。

最後に、奥寺が組の「全体が終始参加する」こと、「競争的」、「競技的」な要素を遊技に求め、スポーツによる教育を「真の人格陶冶の手段」として推奨していた。この点について合わせて考察し、1920年代の少年団運動におけるスカウト・ゲームや遊びの受容過程に果たした『列強少年の社会教育』（1923）の役割、1920年代の少年団運動におけるスカウト・ゲームや遊びの位置づけについて述べ、括りとする。

1. 少年団日本連盟における遊戯について

先に述べた通り、本節では奥寺の「遊技」概念について論じる前に、1920年代の少年団日本連盟がどのような遊戯の実践を模範としていたのかについて、『少年団教範』、『スカウト読本』をもとに検討する。

1-1. 『少年団教範』におけるスカウト・ゲームと少年団日本連盟

『少年団教範』は1925年に出版された*Scouting for Boys*の翻訳書であり、第一次世界大戦後に改定された*Scouting for Boys*第10版、第11版をもとに訳出された²¹。同書を出版した経緯について、翻訳者の一人であり、第二次世界大戦後、財団法人ボーイスカウト日本連盟の総長を務めた三島通陽（1897-1965年）は、佐野常羽をはじめとする指導者たちから、*Scouting for Boys*の全訳を刊行して欲しいとの要望が連盟創設時の幹部会に寄せられた結果、初代総長である後藤新平の指示で委員会が立ち上げられ、委員内で分担して翻訳にあたったと述べている²²。また、連盟の機関紙『少年団研究』は「少年団教範がほしい!! とは既に少年団に携わっている人、新に少年団を起こそうと研究中の人達からどの位要求されていたか知れない。…中略…十章に分たれた内容は指導者にとって如何に資益する所があるか知れない。」²³と『少年団教範』の需要の高さを示し、同書が少年団の発足を望む人々の要請を受けて、指導者層向けに刊行されたことを伝えている。なお、1925年3月10日に開催された少年団日本連盟の理事会にて、第一回団勢調査の報告が行われ、当時の加盟団数は436、スカウト数は4万5006名であるとされた²⁴。そして、全国各地に少年団日本連盟の加盟団体が設立される中、指導者養成の拡充を目的として、『少年団教範』を含む各種教範の出版や、指導者訓練所の設立に連盟は取り組むこととなる。

同書の第一頁には、「指導員に対する注意」として、①スカウト教育は実践、遊戯、競技を主体として行われること、②遊戯はパトロールと呼ばれる6～8人の少人数集団でのチームマッチとして行うこと、③各スカウトの全員参加が基本となることが述べられている。このよ

うに、指導者に向けて実行Practice、遊戯game、競技competitionの三つを通してスカウト教育を実施することの必要性は原書の11版にも明示されている。

スカウティングの教育は出来る丈、実行、^{ゲーム}遊戯、競技をなさしめてするが良い。^{ゲーム}遊戯は主としてチームマッチ（組の仕合い）を組織し、パトロール（班）がチーム（組）を作る、各^{スカウト}健児は一人も傍観せず、皆共にやるのである²⁵。「ルビは原文ママ」

Instruction in scouting should be given as far as possible through practices, games, and competitions. Games should be organized mainly as team matches, where the patrol forms the team, and every boy is playing, none merely looking on²⁶.

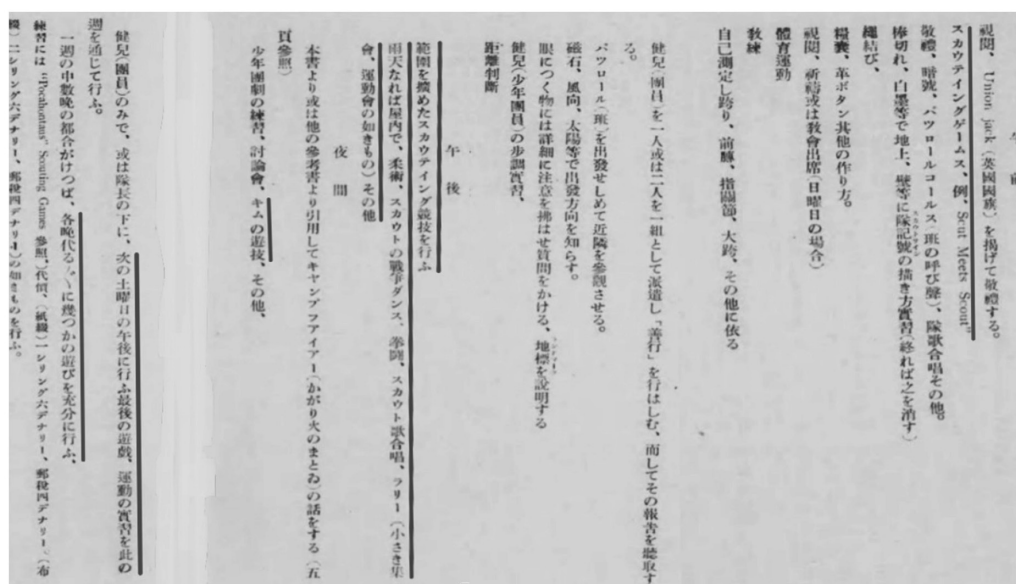


図1 「『少年団教範』における休日の活動内容例」(少年団日本連盟『少年団教範(スカウティング フォア ボイズ)』更新出版社、1925年、3-5頁)。傍線部は筆者による。

すなわち、発足当初の少年団日本連盟におけるスカウト運動は、国際的なスカウトの在り方を模範としていたことがわかる。

実際の活動プログラムとしては3-5頁に休日の例が記され、午前から夜間にかけての活動の中で、毎時複数のゲーム、遊戯、競技のプログラムの実施が促されている。特に、午後の活動については、全て「スカウティング競技」にあてられている。このことから、当時、スカウトの活動プログラムの中で訓話や訓練ではなく、競技、遊戯の占める割合が高く、「実践、遊戯、競技を主体とした」スカウト教育が推奨されていたことがわかる。

しかしながら、スカウト運動において重視される「game」の語は『少年団教範』の中で訳語が統一されていない。例えば、図1の傍線部には「スカウティングゲームス」、「スカウティング競技」、「キムの遊技」、「最後の遊戯」、「遊び」とある。これらの語はScouting game, Kim's game, Final gameを「ゲームス」、「競技」、「遊技」、「遊戯」と訳出したものであり、

すべての語がgameからの翻訳であったことがわかる。阿部生雄は1915年に出版された『井上英和大辞典』を例に、gameの翻訳語として「①戯談、洒落、戯言、②遊戯、③面白キ出来事、④競技」²⁷等、様々な語があてられていたと述べている。そもそも英語のgameそれ自体が局面に応じて、多様な意味を有することばであったため、脈絡によって異なる訳語を付すことは自然である。但し、ここでは並列した用語に異なる語があてられているにもかかわらず、その定義が存在していないため、意識的に区別していたか否かについて確証する手立てがないということになる。

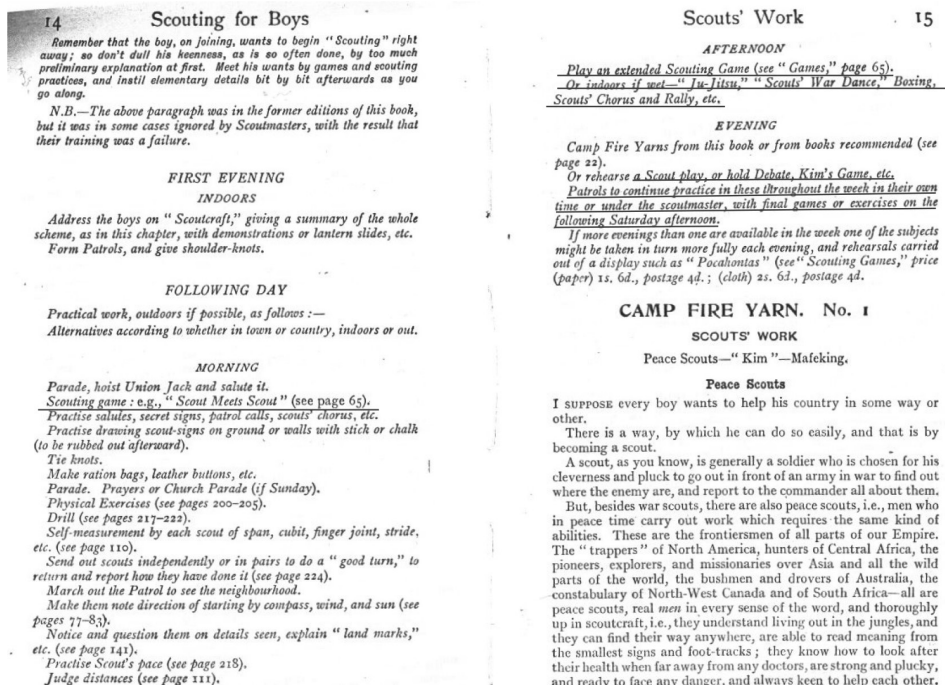


図2 「Scouting for Boys 第11版における休日の活動内容例」(Robert Baden-Powell. *Scouting for boys: a handbook for instruction in good citizenship through woodcraft* -11th ed. - London: C. Arthur Pearson, 1924, p14-15.)。下線部は筆者による。

加えて、当時の少年団運動の指導者たちがこの『少年団教範』を元に活動を行ったのかも不明である。なぜなら、図1に示されているように、「Union Jack（英国国旗）を掲げて」との一文がみられ、文末にシリング、デナリー等、英国の貨幣の単位が使われており英国の教範の直訳であったため、英国スカウトの「実践、遊戯、競技」による教育の重要性を日本の少年団関係者も理解していたことは明らかであるものの、翻訳書をどのように活用し、遊戯、ゲームを実際の活動の中で実践していたのかについては教範の訳を辿るだけでは明らかにならない。

そこで、より実態に即した少年団関係者による実践内容に迫るには、単なる翻訳書ではなく、日本におけるスカウト実践が想定された書に注目する必要がある。よって、次に深尾韶『スカウト読本』における遊戯、ゲームについて論じていきたい。

1-2. 深尾韶のスカウト教育論と遊戯

深尾韶(1880-1963年)は日本の社会主義運動の草分けの一人として知られ、日本社会党の主幹、評議員として活躍した社会主義者の一人でもあった²⁸。後に社会主義からの転向後、静岡少年軍団の設立やScouting for boysの解説書である『少年軍団教範』(中央報徳会、1915年)を著し、少年団日本連盟の設立以前より、国内でスカウト運動の普及に携わった人物である²⁹。

深尾著『スカウト読本』(1925)の序によれば、「前著『少年軍団教範』」を根本から書き直して…中略…少年が読めば独習の手引となり、指導者が読めば団員訓練の日々のプログラム、訓育細案となるものにしたい³⁰という思いで、『スカウト読本』は執筆された。上記の引用文に「少年が読めば」とある通り、同書は少年団運動に参加していた子どもたちにも読まれることを念頭に書かれたものであった。

遊戯 目次	
假入団用	一
キム競走	一
象評定	一
泥棒侵入	一
變装競走	一
着装競走	一
非常呼集	一
國旗行進	一
旗とり	一
投擲競走	一
荷造競走	一
手押車	一
陸上ボートレース	一
氣絶者引出し	一
擔架競走	一
患者運搬	一
手當競走	一
信號競走	一
番號よみ	一
情報通達	一
情人通達	一
片足鬼	一
人差し	一
人垣破り	一
綱と毛布	一
輻重競走	一
忍び寄り	一
潜行艇	一
敵艦侵入	一
捕鯊走	一
地圖よみ	一
見取圖作製	一
空・水・陸	一
植物採集競争	一
私は何	一
動物園	一
豚のシッポ	一
逃亡人追跡	一
更替	一
羅針盤	一
寶探し	一
一分間觀察	一
鼻くらべ	一
耳くらべ	一
曲角競走	一
落し物さがし	一
サイン競走	一
珠數つなぎ競走	一
雜遊戯	一
見習健児用	一
二級健児用	一

図3 「遊戯目次」(深尾韶『スカウト読本』少年団日本連盟需品部、1925年、1-2頁。)

同書の構成は、「少年の嘆き」という、とある少年が少年団を結成するに至る物語から始まる。次いで「見習少年健児になるまで」、「二級少年健児になるまで」、「一級少年健児になるまで」、「スカウトの仕上げ」と続き、習熟度別に段階を経るために必要な知識、実践、遊戯の例が教示されている。深尾が用いた見習少年健児、二級少年健児、一級少年健児という区分は英国スカウトのバッジシステムを参考に少年団日本連盟で採用された進級制度を反映したものである。この進級制度とは、団員の技能の習熟度や生活態度をもとに、見習い健児から、二級健児、一級健児へと昇格していくというものであって、見習健児、二級健児、一級健児のそれぞれに、制服の着用方法、スカウト運動や自らの国家や他国に関する知識、ロープや団杖の使い方、野営法、追跡法、救急法などの達成すべき種目が設定されており、所定の種目に合格してはじめて、進級できるという制度となっていた。そして、同書は書物の目次に加えて、同書の中で紹介された70種類の遊戯を「假入団用」、「雑遊戯」、「見習健児用」、「二級健児用」と習熟度別に整理

した「遊戯目次」を有している。

同書で最初に紹介された遊戯は「キム競技」というものである³¹。「キム競技」とは、*Scouting for Boys*に記載されているKim's game³²のことで、隊長が風呂敷の中からお盆の上に、様々なものを置き、それを隠した後に、いくつ隊長が出したものを覚えておくのかを競い合うものである。この「キム競技」Kim's gameは、ラドヤード・キップリングの小説『少年キム』（原題：Kim）の主人公「キム」をモチーフにした遊戯であり、*Scouting for Boys*の初版にも記載されている。

この「キム競技」について、「これからキム競技をやります。キムの話は面白いのですが、それは此次に話すとして、今夜は先ず遊戯の方から始めます。」³³と、深尾が訓話より先に遊戯による導入を促していることは、遊戯gameを通して訓育を施そうとするスカウト運動の本質を伝えていると言える。その後も、深尾はスカウトの習熟段階に則して必要とされる知識、技能を示し、その知識、技能に対応する遊戯を紹介するという形式で、『スカウト読本』を構成している。このことから、深尾が少年団の教育において実践としての遊戯を重視していたことは明白であるといえる。

以上のように、『少年団教範』、『スカウト読本』の特徴は次のように総括できる。

- ① 少年団日本連盟において、*Scouting for Boys*の翻訳書『少年団教範』には、「スカウト教育は実践、遊戯、競技を主体として行われる」という英国由来の国際的なスカウト教育の方針が忠実に明記されていた。
- ② gameの訳語には、「ゲームス」、「競技」、「遊技」、「遊戯」、「遊び」といった様々な語が用いられている。
- ③ 『スカウト読本』において、深尾は遊戯を主とした少年団運動の在り方を示している。すなわち、単に知識、技能を教授するだけではなく、遊戯を通して知識、技能を習得させるという手法を少年団において重視していた。

そこで、次に奥寺による『列強少年の社会教育』をもとに、遊戯、ゲームが少年団運動の中でどのように理論化されたのかについて論じる。

2. 『列強少年の社会教育』にみる奥寺龍溪のスカウト論

『列強少年の社会教育』は少年団のための指導書として1923年に出版された。すなわち、『少年団教範』（1925）、『スカウト読本』（1925）より前に出版されている。また、同書は『ボーイスカウトの精神』（中央報徳会、1922年）、『少年団訓練法要義』（教育研究会、1924年）と三部作をなす奥寺の著作のひとつであり、スカウトを構成する年齢層のうち、最も初期のカブスカウトを対象としていた。

奥寺は同書執筆の目的について「ウルフ・カップの8歳から、11、2歳までの小学生徒を対象として、遊技編を編んだものである」³⁴と述べている。これに対し、12歳から18歳ほどまでの年齢層を対象としたものが『少年団教範』、『スカウト読本』であった。実際、『スカウト読本』の場合はボーイスカウトの年代である12歳から18歳を対象としていたため、『列強少年の社会教育』とは異なる年齢層を対象としていた。このことについて「今の我国の少年団と称する者は、ボーイスカウトの次位のウルフ・カップに相当する、小学校生徒が大多数を占めていて、

主眼たる訓練を施すのには、余りに弱年である」³⁵と奥寺は述べている。すなわち、奥寺はボーイスカウト年代に満たない子ども達によって少年団が構成されていると認識していた。故に、奥寺は少年団員にとって、ボーイスカウト式の教育を施すのは時期尚早であると考え、カブスカウトの教育法をもとにした、より若年層のための少年団の教育を構想していた。

以上から、『列強少年の社会教育』と『少年団教範』、『スカウト読本』の間に対象年齢の違いがあったことは、スカウト教育の年齢層のうち、どの段階に少年団を位置づけるのが適切かという見解の相違によるものといえる。しかし、「実践」、「遊戯」による教育を行うという点は、『列強少年の社会教育』においても強調されている。それでは、『列強少年の社会教育』において展開されたスカウト教育の在り方とはどのようなものであったのか、以下に論じる。

2-1. 『遊技』によるスカウト教育

同書にて、スカウトの訓練の目的とは「実践実行による人格の陶冶」³⁶であると奥寺は述べている。そして、「実践実行による人格の陶冶」をなすためには心身両面からの真の体育の発達が不可欠であるとした³⁷。このように奥寺がスカウト運動において「体育の発達」を重視したことは、学校教育での知識偏重教育に対する批判と関わっている。つまり、下の引用文に示したように、当時の学校教育は無味乾燥で「人格的訓練は、知力のみでは不十分である」と批判し、「学校教育の欠陥」とは、「少年本来の欲求を満足させることが出来」ないことにあったとした。しかも、それはスポーツや遊戯の欠如の結果であり、少年の欲求を無視して、「遊技の価値」を軽視した学校教育が累積した結果、適切な「人格的訓練」を施すことが出来なくなったためであるとし、これを補うために少年本来の欲求を満足させる身体的な遊技が有効であると次のように述べている。

今日の学校教育、特に都市に生活する少年は、少年本来の欲求を満足させることが出来ず、全く乾燥している状態である³⁸。

人格的訓練は、知力のみでは不十分である。それは今日の学校教育の欠陥として、論究するの余地がない³⁹。

これはスポーツを勉強に害ありとし、遊技の価値を無視した教育の累した結果ではあるまいか。遊戯を遊び戯れると、書き表した考えが誤っている。以後は遊技としよう⁴⁰。[太字は筆者による]

加えて、「遊戯を遊び戯れると、書き表した考えが誤っている。以後は遊技としよう。」と奥寺が述べ、戯れと書く「遊戯」と技と書く「遊技」とを区別し、後者の「遊技」にスカウト教育上、特別な意味を与えていることは重要である。なぜなら、彼は次節で述べるように、競技と遊戯の間に位置づく「遊技」の積極的な意義について論じているからである⁴¹。そこで次に、奥寺のいう「遊技」概念を明らかにするために、『列強少年の社会教育』の中で展開された各種遊技の分類とその内容を分析していく。

2-2. 「遊技」、「スポーツ」、「スカウト・ゲーム」

『列強少年の社会教育』の「各種遊技の要旨」⁴²という章において、奥寺は「動的室内遊技」、「静的室内遊技」、「運動場及野外の遊技」、「一組遊技」、「斥候遊技」、「対抗競争」、「対抗競技」、

及び「スポーツ」に区分して、遊技を説明した。なお、上記の要旨の中で、彼は「静的室内遊技」、「一組遊技」について、「静寂を要する遊技は、実は適当な遊技でない」⁴³、「この遊技は、二三人の者の競技又は仕合であるから全隊の遊技としては、不適当である」⁴⁴と述べ、その他の遊技と区別した。つまり、「静的室内遊技」、「一組遊技」を「適当な遊技でない」とし、「静寂」は子どもにとって自然ではなく、むしろ「仕事」となるとし、2、3名で行う「一組遊技」はチームの全体性を欠くとして、以下のように述べている。

只音を立てると、他の妨害になるという場合に、之に応ずる遊技が必要である。併し静寂を要する遊技は、実は適当な遊技でない。拘束される遊技は無理で、静寂は不自然である。自然に静寂になるのは仕事である。従って、かゝる遊技は沢山は得られない。只必要が起った時に、この遊技をするのであって、静寂を必要とする事が度々起るようであつたら、集会所を変更するより外はない⁴⁵。

「只音を立てると、他の妨害になるという場合に、之に応ずる遊技が必要である」の意味は、静的室内遊技は騒音が禁止される場合や他者の妨害となる場合に行うことが想定されていたことを指す。「静的室内遊技」の具体例として奥寺は、「動物園」という遊びを挙げている。これは少年たちが輪になって屈み、それぞれが何れかの動物の名前を割りあてられ、中央に座ったものが唱えた動物の名前の者が跳び上がるという遊びである⁴⁶。その他にも、「小声通信」、「鼻きゝ」、「さと耳」などの静的室内遊技の例を挙げているが、いずれもその場から大きく体を動かさない、言葉遊びや伝言ゲームのようなものであった。

また、「一組遊技」については、以下のように述べた。

この遊技は、二三人の者の競技又は仕合であるから全隊の遊技としては、不適当である。遊技の大綱としては、傍観者がなく、全体が同時に行うという方針を守らなければならぬ。…中略…併し競技という風にしてやると、何でも子供には、非常に気に入るものである⁴⁷。

上記の通り、一組遊技について「遊技の大綱としては、傍観者がなく、全体が同時に行うという方針を守らなければならぬ」と「全体が参加する」ことを求めつつも、「かゝる遊技は、組長が遊技を充分了解し、部下の指示がよければ、組長の指揮の下に、二十分間も費やして、充分遊び甲斐のあるものである」⁴⁸とした。また、「子供も喜べば、組長には、教方、規律、審判、忍耐の最上の練習である」⁴⁹とも述べており、指導者が遊技による教育方法を習得する上で、一組遊技の実践が有効であると評価していた。すなわち、「静的室内遊技」、「一組遊技」は、静寂が必要な場合、指導者による教育方法の取得という特殊な場合や目的がある際に、実施されるものであった。

なお、先の引用文に見られたように、「全体が同時に行う」ことを奥寺が求めた理由として、パトロールシステムというスカウト運動に特有の小集団教育が影響していたと考えられる。なぜなら、このパトロールシステムについて、奥寺は次のように述べているからである。

ボーイ・スカウト訓練の基礎ともいべきものは、^{パトロール}斥候班の編制である。…中略…この斥候班は、作業、遊技の時の単位となり、自治の精神、団結心、人格の滋養に、必要な編成である。

小学校生徒に相当する、ウルフ・カップにも、この編制を採用し、六人を一組とし、数組三十六人を限

度として、一隊を組織する。…中略…この斥候班とか、組とかいう事は、訓練上最も有効な編成であって、隊長の努力を経済的にし、各自は互い勵精して、自發的に奮勵するようになる⁵⁰。[ルビは原文ママ]

上記のように、斥候班での集団による作業、遊技といった活動は、自治の精神、団結心を養い、人格に滋養を与えるものであると奥寺は述べている。しかも、それらは斥候班、組といった少人数集団による作業、遊技を通して養われると考えていた。こうした「静的室内遊技」、「一組遊技」に関する批判によって、奥寺が遊技に求めていたいくつかの要素がわかる。まず、少年たちが「拘束される遊技は無理」と述べ、大きな身体的動作を伴う遊技を理想と考えていた。次いで、身体的な遊技を重視したことは、2-1『『遊技』によるスカウト教育』で述べたように、奥寺が少年団教育に「心身両面からの眞の体育の発達」を求めていたこととも関わろう。最後に、1対1の遊技よりも「全体が終始参加する」集団による遊技を重視していたと言える。

こうした、大きな身体的動作を伴い、「全体が終始参加する」ことに当てはまる遊技として、奥寺は「動的室内遊技」、「運動場及野外の遊技」の二つを紹介している。この二つの遊技について、奥寺は「屋内遊戲の全部は、屋外で行われるものであって、しかも一層有効で、一層大なる範囲で、一層活発に行われる」⁵¹と述べている。このように、彼は「運動場及野外の遊技」を重視し、それが実践できない場合は「動的室内遊技」を行うことを促し、主として戸外で行う運動実践を想定していた。それゆえ、上記の二つの遊技には共通する点が多い。

また奥寺は「動的室内遊技」、「運動場及野外の遊技」を行う際に、指導者に次の二点に留意するように促している。

- 第一に、屋内遊戲は、組に別かれても、別かれないでも、全体が終始参加する遊技たること、
- 第二に、九歳以上十二歳位の子供を相手とする遊技であるから、興味を添えるために、多少競争的の遊技であること⁵²。

「興味を添えるために、多少競争的の遊技であること」と述べているように、奥寺は、遊技における競争性、競技性を重視していた。例えば、動的室内遊技として、「棒取り」、「人廻し」、「帽子取り」、「猫鼠」、「空中戦」、「海軍奇襲」、「潜航艇」、「白狼、黒狼」、「爆弾攻撃」、「爆弾投下」の10種が紹介されているが、このうち「棒取り」、「人廻し」、「爆弾投下」以外の7種は二組に分かれて勝敗を競う形式をとっている。このように奥寺が競争性を重視したのは、単に子どもの「興味を添える」という目的に留まらなかった。

奥寺は遊技における競争性、競技性の効能について、次のように述べている。

遊技が適当に考案され、組織されると、身体を健康を増し、活動を敏捷にする。のみならず、大笑、上機嫌、仲よしという、訓練の最重要な要目を、発達させる。同時に、対抗競技などをすれば、**団結心、公正の競技を修練し、従って我儘勝手な風がなくなる**⁵³。[太字は筆者によるもの]

ここで奥寺が用いた「公正の競技」という語は、Fair Playに相当しよう。なぜなら、彼は上記の引用文に続く「スポーツと教育」の章にて、英国における「スポーツの精神」に言及しているからである。たとえば、以下の引用文のように「アングロ・サクソンを偉大ならしめたものは…中略…正当な努力により、立派な勝を得ようとする気魂である」⁵⁴と奥寺は述べた。加

えて、スポーツを通して培われる、共同、集団の教育について言及した際には、日本の武芸との比較を交えて、日本人は「共同して事をなす時に、甚だ不得手」であるとした。これに対し英国由来の「スポーツの精神」は「彼のスポーツの精神は、我を忘れて、〈全体の為め〉に」という所に、見るべき点がある」と集団のチームスピリットがある点を強調した。すなわち、次のように述べている。

アングロ・サクソンを偉大ならしめたものは、彼等の血管内にスポーツマンの血が流れているからだとは、彼等の等しく認めている所である。クリケットにしても、フット・ボールにしても、ボート・レースにしても、皆相当の歴史がある。ゴルフ、テニスに至るまで、彼等に起源して、世界的に行われている。皆作法があり、礼儀がある。正当な努力により、立派な勝を得ようとする気魂である。スポーツマンシップというのがこれだ⁵⁵。[原文ママ]

猶重要な相違は、我武芸は多く個人対抗であるのに、彼の競技の多くは、組を作り、規則を設け、共同して勝利を得ようという点である。これは個人としては我々は立派でも、**どうも共同して事をなす時に、甚だ不得手であるのは、この辺の相違から起るのではあるまいかと思う。彼のスポーツの精神は、我を忘れて、〈全体の為め〉にという所に、見るべき点がある。**そして今度の大戦などで見ると、何か競技の主将であった者は、志願兵として将校に昇進すると、立派に統率の技量を表わしている⁵⁶。[太字は筆者によるもの]

奥寺の言う「アングロ・サクソンを偉大ならしめたもの」、「正当な努力により、立派な勝を得ようとする気魂」とは、周知のように、英国史家 J・A・マンガ⁵⁷んらや村岡健次らがこれまで明らかにしてきた「男らしさ、忍耐力、協調的集団精神、フェアプレイの精神」⁵⁸を基調としたスポーツ教育思想、アスレティズムを指すものであったといえる。奥寺は続ける。

併しながら、…中略…傍観者が多くなる傾は、之を戒めなければならぬ。なるべく多種多様の競技武芸などを選んで、多くの者が、スポーツの精神を了解するようにしたいものである。外国でも、大抵の競技は、選手の独占となり勝ちで、所謂職業的選手の出現などは、その弊ともいべきものである。そこでバーデン・パウエル將軍は、この弊を矯んが為めに、**全体が各責任観念を帯んで参加し、傍観者を出さないように、各種のスカウト競技を案出したのであった。**⁵⁹ [太字は筆者によるもの]

上記で、「多くの者が、スポーツの精神を了解するようにしたい」と奥寺は述べつつも、過度な競技主義、職業的選手の出現を批判した。そして、「この弊を矯んが為めに、全体が各責任観念を帯んで参加し、傍観者を出さないように、各種のスカウト競技を案出したのであった」と述べている。すなわち、奥寺は英国において培われた「スポーツの精神」、アスレティズムを加味したバーデン・パウエルによる「スカウト競技」Scout gameを称揚していた。

奥寺は「スポーツの精神」、「集団スポーツ」を意識した「スカウト競技」Scout gameを尊重し、少年の教育において競技性を有する遊技を通して、身体性、集団性の獲得を重視していたことがわかる。その実践は、「我を忘れて、『全体の為め』」という英国スポーツ教育イデオロギーを少年団における教育、スカウト・ゲームの中で体得することに他ならなかった。

しかし、奥寺は少年団の教育において、即座にスポーツ教育に移行することが適当であると考えていたわけではなかった。先に述べた通り、彼は子どもたちの年齢層に応じた遊技実践を説いていた。実際、奥寺は、スポーツ、スカウト・ゲームについて「真の人格陶冶の手段として

有効である。従順，自制，立派な仕合をして，共同の為に努力する訓練になる」⁶⁰と評価しつつも，スポーツや，スカウト・ゲームが「今の我少年団の小学時代の年齢の者には，一般に不適當である」⁶¹とも述べている。

すなわち，奥寺は少年団における教育の中で，スポーツ，スカウト・ゲームといった「真の人格陶冶の手段」となる訓練の準備段階のものとして，少年団の遊技による教育を位置づけたといえる。このように奥

寺が遊技からスポーツ，スカウト競技への移行過程を描いたことは，ドイツの教育学者ヘルマン・レールスによる「遊戯からスポーツへ」の発展過程を想起させる。図4に示した通り，レールスが遊戯から競技スポーツへの推移の中間に，「遊戯スポーツ」，「スポーツ遊戯」という概念を設定した。同様に，奥寺もまた「真の人格陶冶の手段」であるスポーツ，スカウト競技の前段階に，既存の遊戯という語ではなく「遊戯」と「競技」の中間に位置づくものとして，「遊技」の語を用いたといえる。

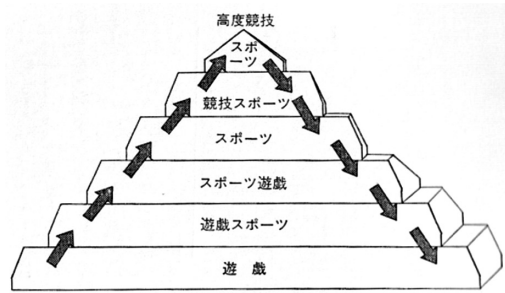


図4 「遊戯とスポーツの相互関係」（H.レールス著，長谷川守男訳『遊戯とスポーツ』玉川大学出版部，1987年，225頁）。

結語

本稿では奥寺龍溪著『列強少年の社会教育』（1923）に着目し，1920年代の少年団運動におけるスカウト・ゲームや遊びの概念について論じた。そして，『少年団教範』，『スカウト読本』を通じた分析によって，1920年代の少年団日本連盟には英国のScouting for Boys内の記述に忠実な「実践，遊戯，競技」を主体的に行うという国際的なスカウト教育の方針が踏襲されていたこと，知識，技能を教授するだけでなく，遊戯を通して知識，技能を体得させるという手法が教示されていたことがわかった。

しかし，上述の翻訳書や指南書には遊戯の種類や実践方法は示されていない，なぜ，そのような遊戯，ゲームを少年団運動の中で必要としているのかについては殆ど記されていない。本稿で奥寺による『列強少年の社会教育』を詳細に分析した結果，以下のことが明らかになった。

- ① 奥寺は，少年団による教育の対象を9-12歳の年齢層の小学生生徒とし，「少年本来の欲求を満足させることが出来」，学校教育を補うために，遊技による少年団の「人格的訓練」が有効であると考えていた。
- ② 遊技による教育を実施する上で，スカウト運動を英国由来の「スポーツの精神」に求め，身体性を伴うこと，「全体が終始参加すること」，競技性を重視した。
- ③ 「動的室内遊技」など，集団全員の参加を可能とし，競技性を有した少年団における「遊技」を，スポーツ，スカウト・ゲームの準備段階の教育として位置づけた。かつ，スポーツ，スカウト・ゲームによって培われる道徳性，精神性を「真の人格陶冶」と称賛し，少年団の主な対象となる小学校年代の子ども達には，「遊技」を通じて，スポーツ教育

に段階的に移行することを説いた。

それゆえ、『列強少年の社会教育』（1923）は遊戯と競技の中間にあった「遊技」を少年団の教育として重視し、英国のスカウトに忠実でありながらも、戦前の初等教育段階の子どもの年齢区分に応じたスカウト・ゲームを「遊技」概念を通じて、普及させるものであったと言える。このことはすでに1930年代にはヨーロッパで知られていたJ・ピアジェの言う発達段階に応じた認知発達学と同時代的にもアナロジーがあろう⁶²。奥寺が理論化した「遊技」は少年団日本連盟の指導者養成会の講師でもあった奥寺自身によって伝えられ、同書は少年団日本連盟から少年団指導者検定の参考書として指定され、指導者向けの教本として活用されていた。その後、奥寺は、少年団日本連盟の機関紙『少年団研究』を中心に、少年団のスカウト化を理論面で支え、英国由来の「スポーツの精神」を模範としたスカウト運動の在り方を普及し続けた。奥寺は晩年の1934年1月から1936年5月にかけて「訓練の仕組み」、「訓練の組立て」とい長期連載を『少年団研究』に投稿するが、その中で、本稿の冒頭に示したバーデン・パウエルの「Scouting is not a science」を次のように詳細に解説している。

『スカウト訓練は、幽玄、難解の科学でない。之を正しい光に照らして考えるならば、寧ろ愉快的な競技である。』訓練を遊戯化し、之を競技に仕組んだものだから、子供等から見れば訓練を競技と考えて、その規則を守らなければ、公明正大な競技は行はれないと考えている⁶³。〔二重括弧は原文ママ〕

上記の連載が終了した1936年に奥寺は他界した。よって、晩年、彼が論じた「訓練を遊戯化し、之を競技に仕組んだもの」とは、本稿が以上論じてきた「遊技とは何か」を集約したことばにあたると思われる。

周知の通り、1936年に日独防共協定が締結され、1938年にはヒトラーユーゲントが来日する⁶⁴。よってこの時期までに英国流はもはや主流ではなくなっていた。なお、英国パブリックスクールのスポーツ教育思想、「アスレティシズム」および「競技性」との関連性について、奥寺は自身の著作の中でパブリックスクールにおける教育について繰り返し、言及している⁶⁵。但し、本稿では、奥寺の「遊技」論に限定して論じた。日本における少年団教育への「アスレティシズム」の影響については更なる検討を重ね、別稿にて論じていきたいと考える。

文献註

¹ “Scouting is not an abstruse or difficult science: rather it is a jolly game” (Robert Baden-Powell. *Aids to scoutmastership: a handbook for scoutmasters on the theory of scout training*. 1919, p.4).

² 例えば、ボーイスカウト日本連盟の100周年特設欄には次のような一文がみられる。「少年たちの旺盛な冒険心や好奇心をキャンプ生活や自然観察、グループでのゲームなどの中で発揮させ、「遊び」とおして少年たちに、自立心や協調性、リーダーシップを身につけさせようとしてしました。これがボーイスカウト運動の始まりです」（ボーイスカウト日本連盟100周年特設サイト「この運動の目指すものとその教育法」https://100th.scout.or.jp/education_method/ 最終閲覧日2023年11月7日）。

³ 上平泰博、田中治彦、中島純『少年団の歴史』萌文社、1996年。

⁴ 田中治彦『少年団運動の成立と展開—英国ボーイスカウトから学校少年団まで』九州大学出版会、1999年。

⁵ 矢口徹也『女子補導団—日本のガールスカウト前史—』成文堂、2008年。

- ⁶ 圓入智仁『海洋少年団の組織と活動—戦前の社会教育実践史—』九州大学出版会, 2011年。
- ⁷ 圓入智仁「後藤新平の少年団教育思想」『社会教育学研究』2019年, 第55巻, 1頁-10頁。
- ⁸ 昆野伸幸「二荒芳徳の思想と少年団運動」『明治聖徳記念学会紀要』2014年, 第51巻, 146頁-162頁。
- ⁹ 松岡悠和「少年団日本連盟と宗教系少年団の関係」『社会教育学研究』第59巻, 2023年, 41-53頁。
- ¹⁰ スカウト, 少年団史研究の脈絡から外れるが, Gameという語の日本の受容に関しては, 阿部生雄による先行研究がある。阿部は19世紀前半から20世紀前半に出版された英和辞典を通じた分析を行った。そして, 当初, 賭けや勝負事, 狩猟と強い結びつきを有して日本で紹介されていたGameという語が, 1915年に出版された『井上英和大辞典』において, 「①戯談, 洒落, 戯事, ②遊戯, ③面白キ出来事, ④競技, 試合, 勝負, …」というように広範な意味領域を有する語として明示されるようになったとした。(阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会, 2009年, 20頁。)
- ¹¹ パトロールシステムとは, 「班制度」と訳されるスカウト運動に特有の小集団教育制度である。これは, 6-8人で構成されるパトロールを基本活動の単位とするもので, パトロール・リーダーはスカウトの中から選ばれる。そして, いくつかのパトロールが集まって, トループ(隊)を構成し, このトループのリーダー(スカウト・マスター)は大人が担当する。少年たちにパトロールの運営を任せ, 大人は援助するという指導体制は当時, 画期的なものであったという。(上平泰博, 田中治彦, 中島純, 前掲書, 37頁)
- ¹² バッジ・システムとは, スカウトの進歩や個人の技能に対して, バッジを与えるという制度である。バッジ(記章)にはスカウト全般の活動に関する進歩記章と, 個人の趣味や技能など特定の課目に対して与えられる技能章の二種類がある(上平泰博, 田中治彦, 中島純, 前掲書, 38-39頁)。
- ¹³ 上平泰博, 田中治彦, 中島純, 前掲書, 173頁。
- ¹⁴ 奥寺は1908年から1925年まで東京府立第三高等女学校の教諭を勤めた後, 1925年以降, 少年団日本連盟の主事, 参事, 健児部国際班長となった。また, *The Wolf cubs Handbook, Rovering to Success*等の英国スカウト運動の教範を多数翻訳し, 草創期の少年団運動においてスカウト教育の理論面での基礎を作った人物とされている(田中治彦「『少年団研究』解題」, 『少年団研究, 別冊』, 大空社, 1997年, 28頁)。
- ¹⁵ 二荒芳徳「三盟兄の逝去を悼む」『少年団研究』第13巻第8号, 1936年8月, 14頁。
- ¹⁶ 上平泰博, 田中治彦, 中島純, 前掲書, 166-169頁。
- ¹⁷ 同上, 178頁。
- ¹⁸ 深尾韶『少年軍団教範』中央報徳会, 1915年。
- ¹⁹ 著者不明「検定受験心得」『少年団研究』第2巻第4号, 1925年4月, 44頁。
- ²⁰ ウルフ・カブ, カブスカウトとは, 第一次世界大戦後のスカウト運動の組織整備によって新設された, スカウトの年少部門である。1916年に年少者訓練の教範『ウルフカブズ・ハンドブック』が出版され, これをもとに, 8歳から11歳までのボーイスカウトに満たない年少者の訓練指針が構成されることとなる(上平泰博, 田中治彦, 中島純, 前掲書, 57頁)。
- ²¹ なお, 『少年団教範』の序文には, 第10版, 第11版に加えて, 第一次世界大戦前に出版された*Scouting for Boys*第6版の序文を翻訳したものが記載されている。第6版の序文を掲載した意図について, 翻訳, 編集を担当した三島通陽は「深尾主事が原書の第六版をもっていられるのでお願いして特にその序文を訳していただいて記念の為にのせることにした」と述べている(三島通陽「校了後に」『少年団教範: スカウティング・フオア・ボーイス』1925年, 551頁)。すなわち, 第6版の序文を掲載したのは, 日本におけるスカウト運動の先駆者であった深尾への敬意故であり, 『少年団教範』は*Scouting for Boys*第11版, 12版を元に訳されたと考えるのが妥当であろう。
- ²² 三島通陽「日本語版の刊行にあたって」バーデン・パウエル著, 財団法人ボーイスカウト日本連盟訳『スカ

ウテイング フォア ボーイズ第27版 (1952年版)』財団法人ボーイスカウト日本連盟, 1957年, 1-4 頁, 2 頁。

²³ 著者不明「少年団教範現はる」『少年団研究』第2巻, 第9号, 1925年9月, 36頁。

²⁴ スカウト運動史編さん特別委員会編『日本ボーイスカウト運動史』ボーイスカウト日本連盟, 1973年, 112頁。

²⁵ ロバート・エス・エス・バーデンパウエル著, 少年団日本聯盟訳『少年団教範: スカウティング・フォア・ボーイス』更新出版社, 1925年, 1 頁。

²⁶ Robert Baden-Powell. *Scouting for boys: a handbook for instruction in good citizenship through woodcraft* -- 11th ed. -- London: C. Arthur Pearson, 1924, p13.

²⁷ 阿部生雄, 前掲書, 20頁。

²⁸ 市原正恵「もうひとりの明治社会主義者—深尾詔の生涯」『思想の科学 第6次』第75号, 1977年, 83-97頁。

²⁹ 田中治彦「少年団運動の成立と展開に関する研究」九州大学博士学位論文 (教育学), 1996年, 70頁-72頁。

³⁰ 深尾詔『スカウト読本』少年団日本連盟需品部, 1925年, 2 頁。

³¹ 深尾, 前掲書, 19-20頁。

³² Robert Baden-Powell. *Scouting for Boys: A Handbook for Instruction in Good Citizenship, Part 1*, London: Horace Cox, p.54.

³³ 深尾, 前掲書, 19頁。

³⁴ 奥寺龍溪『列強少年の社会教育』尚文堂, 1923年, 2 頁。

³⁵ 奥寺, 前掲書, 82頁。

³⁶ 同上, 96頁。

³⁷ 同上, 100頁。

³⁸ 同上, 90頁。

³⁹ 同上, 99頁。

⁴⁰ 同上, 116頁。

⁴¹ 「遊技」の語は, 谷釜了正によれば, 大正期に「競技スポーツの隆盛」を目の当たりにした遊戯や教育関係者の間で生まれた「遊戯及競技」の簡略語であるとされている (谷釜了正「学校『球技』の成立事情—球『戯』から球『技』への移行過程 (明治40年代~大正15年) に関する一考察」『日本体育大学紀要』12号, 1-11頁, 1983年)。奥寺がここで「遊戯と競技」の中間にあるものとして「遊技」の語を用いたことについては次節で示す通りである。

⁴² 奥寺, 前掲書, 151頁。

⁴³ 同上, 159頁。

⁴⁴ 同上, 161頁。

⁴⁵ 同上, 159頁。

⁴⁶ 同上, 179頁。

⁴⁷ 同上, 161-162頁。

⁴⁸ 同上, 163頁。

⁴⁹ 同上, 163頁。

⁵⁰ 同上, 151頁-152頁。

⁵¹ 同上, 160頁。

⁵² 同上, 153頁。

⁵³ 同上, 111頁。

⁵⁴ 同上, 115頁。

⁵⁵ 同上, 115頁。

⁵⁶ 同上, 123-124頁。

⁵⁷ J. A. Mangan, *The Games Ethic and Imperialism: Aspects of the Diffusion of an Ideal*. Frank Cass, 1998, pp.69-70.

⁵⁸ 村岡健次『近代イギリスの社会と文化』ミネルヴァ書房, 2002年, 99頁。

⁵⁹ 奥寺, 前掲書, 123-124頁。

⁶⁰ 奥寺, 前掲書, 165頁。

⁶¹ 奥寺, 前掲書, 162頁。

⁶² 大浜幾久子「ピアジェ理論の展開：ジャン・ピアジェ生誕百年にあたって」『教育心理学年報』第36巻, 147頁。

⁶³ 奥寺龍溪「訓練の仕組み（十三）」『少年団研究』第12巻第二号, 19-21頁, 20頁。

⁶⁴ 上平泰博, 田中治彦, 中島純, 前掲書, 265頁。

⁶⁵ 奥寺龍溪『ボーイ・スカウトの精神』中央報徳会, 1922年。奥寺龍溪『少年団訓練法要義』教育研究会, 1924年。奥寺龍溪「『ボーイ・スカウトの精神』を書いた頃」『少年団研究』9巻4号, 10～13頁, 等。

A Study of Scouting Games and ‘Yūgi’ in *Rekkyō Shōnen no Syakai Kyōiku* (*Social Education for Boys with Western Power*) (1923)

Katsumi ISHIDATE

Key Words

Scouting, *Shōnendan*, ‘yūgi’, play, game

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the concept of Scouting games and ‘yūgi’ in *Rekkyō Shōnen no Syakai Kyōiku* (1923) written by Ryūkei Okudera, one of the leaders of the early Scouting movement and the director of Scout Association of Japan, *Shōnendan*, the former body of the current Scout Association of Japan which was established in 1922. While there are many research papers that discuss how the social education movement of scouting was institutionalized in Japan, there are few studies that analyze how games and play were introduced and practiced in the movement when early scouting movement developed in Japan. Therefore, this study analyzed on how games and play were theorized and the word, ‘yūgi’ through the actual activities and theories described in the above Scouting handbook written by Okudera in the 1920s. In conclusion, it was figured out that ‘yūgi’ in *Rekkyō Shōnen no Syakai Kyōiku* was characterized in accordance with the concept between ‘play’ and ‘competition’ which contributes to appropriate methods for children in the school age of primary school. In addition, the methods were mostly referred to Scouting for Boys in Britain and the concept of ‘yūgi’ had an important role to pervade the essential idea of Scouting Association.